



Data

監督: 藤元明緒
出演: フ・ボール・ポー/ラン・ザ・
 コップ

.....
.....
.....
.....
.....

👁️👁️ みどころ

あなたはインパール作戦を知ってる？百田尚樹の原作を映画化した『永遠の0』（13年）と同じように、私の友人の若者が、ある日26歳の時にインパール作戦で戦死した祖父の白骨を尋ねる旅に。それは一体なぜ？

泰緬鉄道は『戦場にかける橋』（57年）で有名になったが、インパール作戦とは？白骨街道とは？

第15回大阪アジア映画祭で上映された本作は短編ながら、戦後75年の節目となる今年の「8. 15」を考えるきっかけにしたい。



■□渡邊一孝と藤元明緒らの挑戦に拍手！■□

渡邊一孝がプロデュースし、藤元明緒が監督した『僕の帰る場所』（17年）（『シネマ41』105頁）は、第30回東京国際映画祭「アジアの未来」部門で2冠を獲得した他、3つの国際映画祭で受賞するという大きな成果を収めた。そのため、海のものとも山のものともわからない企画段階で同作に300万円の出資をした私は、2020年2月にその返還を受けた。各種映画祭への出品から出発した同作は、各地で高い評価を受けながらの上映が続いたため、トントンながら投資金を回収できたというわけだ。もっとも、そこでの彼らの「お願い」は、その返還金をそのまま次の企画である、日本とベトナムの共同製作による長編映画『フォンの選択』に出資してくれないか、ということ。彼らの能力も人格も既に十分理解し信頼している私は、即座にそれを了解した。

同作は、日本の移民に焦点を当て、「実習先から逃げ出したベトナム人女性が不法就労先で妊娠が発覚し、ある選択を迫られた挙句・・・」というテーマの映画だ。既に撮影は終

了して、今は編集作業に入っており、完成後は、今年の夏以降、各種映画祭に持ち込む予定とされている。そんな彼らが、『僕の帰る場所』での受賞のご褒美としてもらった旅行券(?)で企画し、実現させたのが、本作。それを聞いて、最初は「おめでとう」と言っていたのだが、そのタイトルが『白骨街道』と聞いてビックリ！そりゃ一体ナニ？

■□■白骨街道とは？あなたはインパール作戦を知ってる？■□■

私は、近時話題となっていた毎日ワズ発行の新書版、①石原莞爾著『世界最終戦争』と②元大本営参謀・辻政信著『潜行三千里 完全版』を購入し、斜め読みしたが、これは面白かった。前者は昔からその内容を知っていたが、後者は辻政信の名前は知っていても、彼の幻の名著『我等は何故負けたか』は全然知らなかった。それを初公開したのが、後者だ。

他方、映画『戦場にかける橋』(57年)によって「泰緬鉄道」が有名になったが、「インパール作戦」のことを知っている日本の若者はほとんどいないはずだ。しかし、「インパール作戦」とは？そしてまた、「白骨街道」とは？

そんな本作が、第15回大阪アジア映画祭で3月14日に上映された。そこで、同日夜には渡邊・藤元両氏との会食を予定し、昼間は本作を鑑賞することに！

■□■岸建太郎の祖父が「インパール作戦」へ！■□■

百田尚樹の原作を山崎貴監督が映画化した『永遠の0』(13年)(『シネマ31』132頁)は私の大好きな映画だ。同作は、26歳になった主人公・健太郎が、実の祖父が別にいること、そして宮部久蔵という名のその男は特攻を志願し、健太郎と同じ26歳で戦死したことを聞かされるところから物語が始まっていった。

しかし、『僕の帰る場所』に撮影監督として参加した渡邊一孝と藤元明緒の盟友・岸建太郎も、『永遠の0』の健太郎クンと同じように、彼の祖父が「インパール作戦」に従事中、26歳で戦死したそう。そこで、『僕の帰る場所』のご褒美としてもらった旅行券を使って、あの「インパール作戦」によってできた「白骨街道」までひとつ飛びし、祖父の遺骨捜しを兼ねて短編を1本！そんな企画で実現したのが、16分の短編として完成した本作だ。

■□■標高2000m以上の山の中は？■□■

私は近時、NHKのBS1でお昼間に放映されている映画番組を片っ端からDVDに録画して観ている。先日それで観たのが、黒澤明監督の『蜘蛛巣城』(57年)。その冒頭は山の中に深い霧が流れるシーンから始まり、それが少し晴れたところで1人の伝令が城の中に駆け込む物語が始まっていった。

それと同じように、本作冒頭は、霧(モヤ)がかかっている山の中。しかし、これは日

本ではなく、遙か遠くミャンマー（旧ビルマ）の山で、そこは標高2000m以上あるらしい。そこで始まるのが、今なお登場するという日本兵の遺骨や遺品の発掘作業に向かうトラックと作業員たちの姿だ。彼らはそれなりの見込みの場所で作業を開始したが、さて・・・。

■□■戦後75年の今、本作からあの時代を、あの兵士を！■□■

東京の靖国神社の中には遊就館があり、そこには特攻隊員の遺書はじめとして、膨大な「あの大戦」の資料が収められている。本作は16分の短編だし、製作スタッフが滞在して撮影している間に日本兵の遺骨や遺品は何も発掘できなかったそうだが、それは仕方ない。しかし、本作ラストには、長い棚の上に旧日本軍が使用していたさまざまな銃や飯ごう、その他多くに遺品が並べられているので、それに注目！

『ムルデカ』（01年）（『シネマ1』89頁）を観れば、日本の敗戦後、インドネシア独立のために戦い、その土となった日本人（軍人）たちが、それなりの充実感と満足感を持って死んでいったことがわかるが、「インパール作戦」の行軍中に餓死した多くに日本兵にはそれはなかつただろう。本作を鑑賞することによって、そんな多くの日本兵がいたことを、戦後75年の今、しっかり考えたい。

2020（令和2）年3月17日記